

第1章 河川整備計画の目標に関する事項

第1節 流域及び河川の概要

多摩川は、その源を山梨県塩山市の笠取山（標高1,953m）に発し、途中多くの支流を合わせながら、東京都の西部から南部を流下し、東京都と神奈川県^{おおたくほねだ}の都県境を流れ、東京都大田区羽田地先で東京湾に注ぐ、幹川流路延長138km、流域面積1,240km²の一級河川である。

その流域は、細長い羽状形を呈し、首都圏の南西部にあたる山梨県、東京都及び神奈川県の1都2県にまたがり、流域内の人口は、約425万人（平成7年度国勢調査に基づく算定値）で流域面積の約3分の1を占める中・下流の平野部に集中し、首都圏における社会、経済、文化等の基盤をなすとともに、都市地域における貴重な自然空間を有している。

多摩川は、首都圏を流れ東京湾に注ぐ一級河川の中では、勾配が比較的急な河川であり、中流部でも扇状地的な特性を残している。

上流域に当たる西部の山地の地質は、秩父系古生層と中生層で構成され、最上流部には、花崗岩類が分布している。山地の東側の丘陵及び台地は、広く関東ローム層に覆われている。低地部は、三角洲の堆積物や海浜堆積物から成っている。

多摩川中流部、支川浅川では、河床付近に新第三紀層（粘土及びシルトが固結した層（以下、「いわゆる土丹」という。))の露出する箇所が見られる。

上流部は、御岳溪谷や秋川溪谷に代表される山岳溪谷美に富んだ清流となっており、そのほとんどは秩父多摩甲斐国立公園に指定され、溪流巡りや山歩きなどの場として首都圏の住民に親しまれている。

山間溪谷部を抜けた羽村取水堰付近から調布取水堰までの中流部は、瀬、淵及び中州が存在している。河川敷には、オギやツルヨシなどの群落がみられる。また、礫河原にはカワラノギクなど河原特有の植物やセグロセキレイなどの鳥類がみられる。近年、河川敷にはハリエンジュの繁茂もみられる。また、都市に残された貴重な散策、レクリエーションなどの場として、多くの人々に利用されている。

感潮区間である下流部は、大きく蛇行し、ゆるやかな流れとなっている。広々とした河川敷は、公園やグラウンド等としてスポーツ・レクリエーション等に幅広く利用されている。

河口付近は、川岸近くにヨシ原が広がり、ゴカイなどが生息しシギ類などの採餌の場となっている。干潟が形成されている一方、多くの埋め立てが行われ、日本の高度成長を支えた京浜工業地帯が立地している。

多摩川は、このように首都圏に残された広大な水と緑の空間であり、河口から万年橋までの間だけでも年間約2,000万人（延人数、平成9年度時点）の人々が訪れているとともに、多摩川にかかわりのある数多くの市民団体が結成され、多様で活発な活動が行われている。

また、東名高速道路、中央自動車道、東海道新幹線などの東京と関西方面を結ぶ幹線交通機関はすべて多摩川を横架している。

加えて、多摩川流域には、日本で最初に発見された国の史跡に指定されている縄文時代の大森貝塚や羽村取水堰など多くの歴史的遺産が点在し、文化面では、万葉集にも川と人とのかわりを詠まれたほか、江戸に近いこともあって浮世絵や歌舞伎の舞台ともなった。近年では、マスメディアの中心機能に近く、文化人も多いことから、文化・精神活動の舞台としても重要な役割を果たしている。

なお、東京都、神奈川県を始め関東地方の南部に位置する地域は、平成4年8月、中央防災会議地震防災対策強化地域指定専門委員会により「南関東地域直下の地震により著しい被害を生じるおそれのある地域」として指定され、多摩川流域のほとんどがそれに含まれている。

多摩川右支川の^{あさかわ}浅川は、関東山地東端の山岳地帯である八王子市^{じんばやま}陣馬山（標高867m）等に源を發し、途中南浅川、川口川、^{ゆどのがわ}湯殿川等の支流を合わせながら、扇状地状に開けた八王子市、日野市の市街地中心部を東流したのち日野市^{おちあい}落合地先において多摩川に合流している幹川流路延長30km、流域面積156km²の一級河川である。

浅川流域は山地が多く、高低差が大きいため、河床勾配は1/100～1/230と非常に急なものとなっている。

加えて、その流域は昭和30年代の初頭から首都圏のベッドタウンとして急速に市街地が拡大し氾濫原の人口、資産も急増している。

浅川の生物相は、多摩川の中流域とほぼ共通する種がみられる。浅川は川幅がほぼ一定で河道断面積に余裕が少ないため、洪水時に河道堆積物が流されやすい。そのため河川敷に砂利河原が広く分布し変動も激しく、植物群落の發達していない箇所もみられる。河川敷にある植生は、冠水に強いオギやオオブタクサなど擾乱された土地に生息する種が多い。中流域にはヤマメやホトケドジョウ等が生息し、上流域の性格の強い魚類相になっている。